

Ⅲ 遺 跡

1. 遺跡の状況

平城京羅城門跡は、大和平野の北辺部のほぼ中央にある。東には春日・高円の諸山が、北は佐保・佐紀の諸丘陵が、そして西方には生駒の山並みが望見される。奈良市、郡山市が境を接する所、行政的には両市に二分されている。また、春日の山地に源を発見する佐保川が北から南へ流れ、八条のあたりで秋篠川と合流してさらに水量を増して流れるあたりがこの遺跡の存在する所でもある。

羅城門跡のある一帯は、佐保川の河川敷をのぞいては水田地帯であった。現在は佐保川左岸では、北から工場用地が、南から宅地化の波が迫っている。右岸では、南から宅地化されつつあり、水田が金魚池化するものも多い。

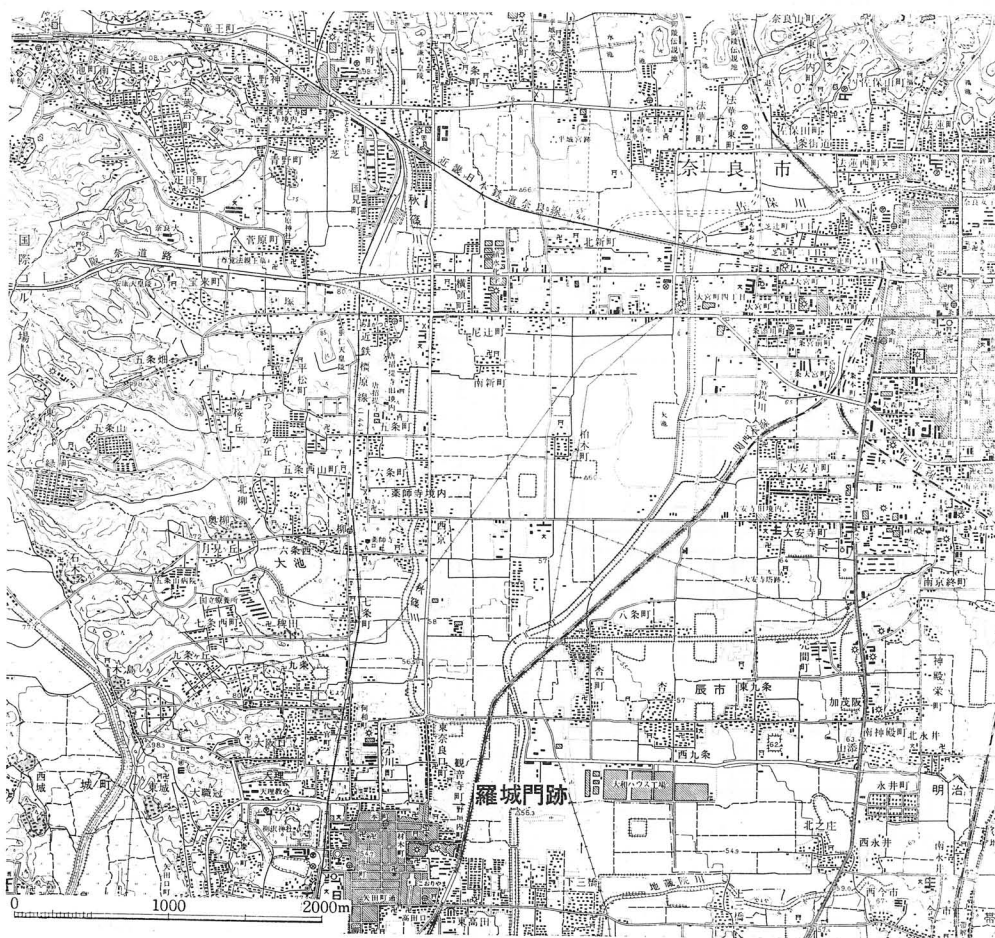


Fig. 3 羅城門跡付近地形図

ここ、佐保川にかかる橋は「来世橋」とよばれている。また、第三次発掘地である金魚池の南西には市道をへだてて、「らいせい墓」とよぶ墓地がある。この墓地の一角には、かつては小さな草堂があり、周囲に土塀がめぐっていたといわれるが、現在はない。墓石は年紀のあるものでは元禄年間のもが一番古い。

この羅城門跡付近を、地図・航空写真でみると、平城京の条坊が水田の畦畔によく残っているが、なかでも京の南限を示すあぜ道が来世橋を中心にして対照的に南へ張り出している様子が目をひく。このことは、1955年、大岡実を中心とした平城京の復原的研究の一環として、平城京の航空写真を作成した際、初めて指摘された。その後、前記の平城京保存調査会で行なった地籍図の字境を利用した調査でもこのことが認められていた。それが今回の三次にわたる発掘調査でうらづけることができた。

第一次の発掘調査は、こうした張り出しを予想しながら、九条大路と羅城の検出を期してⅠ-A～Dの南北方向のトレンチを設定した。

第二次の発掘調査は朱雀と九条の南大路にかかるように鉤手状のⅡ-Aトレンチ、羅城門の南端の状況をさぐるためⅡ-B・Cトレンチ、羅城を含めた京の南端の状況をさぐるためⅡ-Dトレンチを設定した。

第三次発掘調査は、それまでの調査で、羅城門跡が確実にあると予想される市道南側の金魚池北半の全面で行なった。

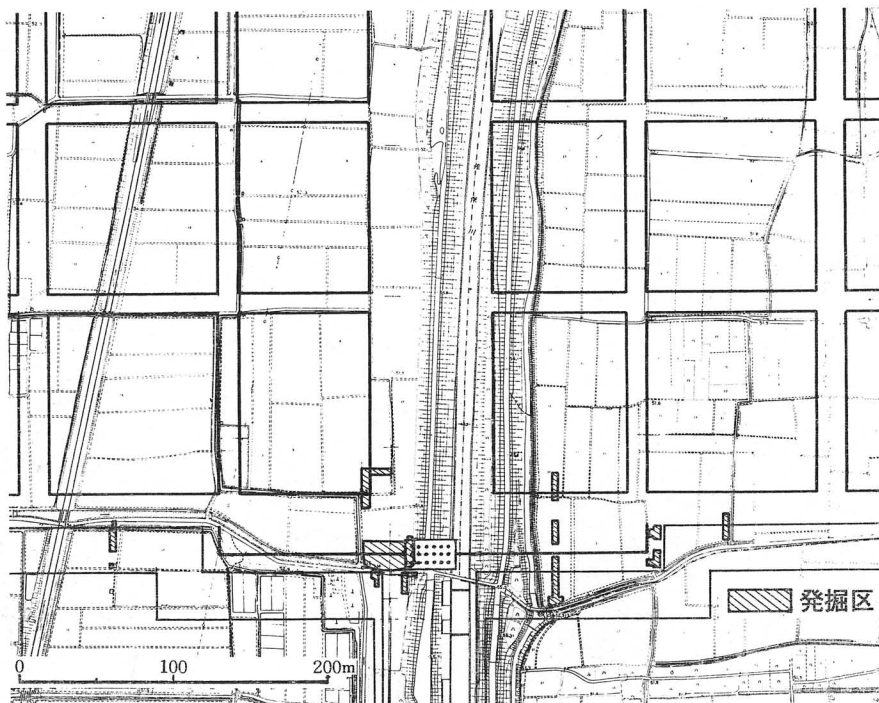


Fig. 4 第一 三次発掘区配置図

2. 第一次発掘調査

発掘地域は、佐保川の左岸にあたり、それ以前の遺構が流失したのち水田として耕作されていた地帯である。そのため、表土・床土下には50~150cmにわたって、細砂・バラス等の流失土が堆積しており、その下層は粘質土となっている。氾濫による攪乱と河川周辺の砂層からの湧水で発掘は困難をきわめた。また洪水による削平のために奈良時代と断定すべき明確な遺構を検出することはできなかった。

1-Dトレンチでは現畦畔直下で東西方向に青色粘質土の基壇状の痕跡と、北側に共伴する東西溝（溝幅約6cm）を検出したが、その時期は明らかにできなかった。その北部は灰色粘土が平坦に続いており、九条大路の北端と堆定される位置に設けたI-Cのトレンチでは、築地および側溝等の遺構は検出することができなかった。なお、1-Dトレンチの基壇状粘土の下層には礫と砂の互層がみられた。

B地区においては、九条大路南端と推定される畦畔の延長線上に幅・高さ約30cmの土塚状の粘土塊を東西方向に約6m検出した。その性格、時期は明確でないが、粘質土上に築かれていた。

I-Aトレンチ南端では、畦畔を一部掘り下げたところ、厚さ約60cmの褐色粘質土層があり、北に傾斜して下っており、築地基底部北端かと想定されたが、その下層に細砂層がみられ、それに伴って北側に幅約2mの灰褐色砂質土の堆積した硬い面を検出した。これは中・近世の農道と考えることができる。なお、その北部は粘土層が次第に下って、地表下約2.5mで完全なバラス層となっている。バラスは1m以上堆積しているが、その上面に漆喰のブロックが数個検出できた。バラス中にはこれら漆喰ブロック片のほか磨滅した瓦・須恵器片、土師器片等がみられる。これら瓦・土器等の検出から、平安期ないし中世に川底であったことが想定できる。遺構は、試掘による小範囲の調査で、また湧水が激しくトレンチの壁面崩壊のため部分的にしか明確にしえなかった。バラスの堆積状況から東西に大きな水路があったものと考えられる。

この地区はこのように河川の存在なり、洪水があり、予想以上に後世の攪乱・破壊が大きいようである。



Fig. 5 第一次発掘調査

3. 第二次発掘調査

II-A トレンチ (PLAN 1 PL. 1 Fig. 6)

この地域の土層は、黄褐色粘土が地山で、その上に、暗褐色粘質土、茶褐色土、灰褐色土、暗褐色土、表土の順に堆積している。奈良時代の遺構は地山上面で検出される。このL字形トレンチの南のところでは、茶褐色土層に切りこまれた溝がある。この溝の埋土は青灰色砂質土で近世の遺物を含んでいる。なお、発掘区西北側では、奈良時代の遺構面よりさらに下層に深い溝の痕跡を認めた。京造宮前の遺構とみられる。検出した遺構は、朱雀大路路面、朱雀大路西側溝、朱雀大路西側築地、九条大路北側溝、九条大路北側築地、暗渠である。

朱雀大路西側築地と九条大路北側築地は、調査地域外で交わるとみられるが、その入隅の部分は、後世の野井戸で破壊され、確認できなかった。両築地の内側一帯では、築地の瓦が転落したままの状態を検出した。両大路の各側溝は、朱雀大路で築地地形の東端から4m東、九条大路で築地地形の南端から3m南にある。築地と側溝の間は平坦地で、堀地にあたる。発掘区東側で、溝から東の平坦部分は朱雀大路の路面にあたる。暗渠は、九条大路北側堀地の部分に、南北方向のものを2本検出した。

朱雀大路西側築地 (PLAN 1 PL. 6-2・7) 地形は掘りこみである。検出したのは築地の基礎地形部分で、築地本体の幅はわからない。地形は幅4.3m、深さ20~30mで、黄褐色斑入りの暗褐色土で一様であり、とくに版築の痕跡は認められなかった。地形内で、東よりに、柱掘り形を検出した。1本柱の築地と考えられる。長さ3mの小範囲の調査であるので確定しがたい。なお、この築地の下層からは、瓦の堆積層と築地の極を検出しており、少なくとも二回にわたる築地造作が考えられる。しかし下層の築地の痕跡はあきらかにできなかった。

九条大路北側築地 (PLAN 1 PL. 6-3・4) 地形は掘りこみである。検出した掘りこみ地形は、幅4.2m、深さ20~35cmで、土は黄褐色斑入りの暗褐色土で一様である。版築の痕跡はとくに認められなかった。なお、築地本体は削平され判らない。

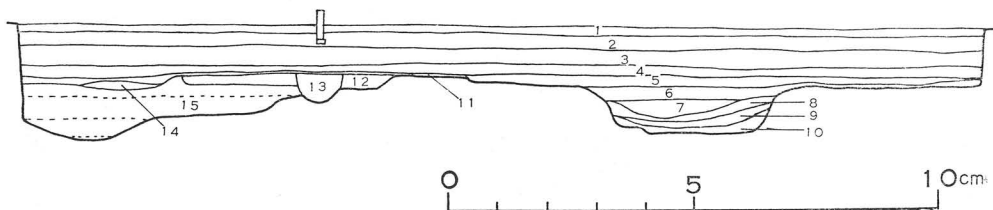


Fig. 6 II-A トレンチ東西土層図

1. 表土 2. 暗褐色土 3. 灰褐色土 4. 茶褐色土 5. 暗褐色粘質土 6. 灰褐色粘土
 7. 灰色砂土 8. 黒色砂混り粘土 9. 暗灰色砂土 10. 灰色粗砂 11. 暗茶褐色土
 12. 黄褐色斑入暗褐色土(朱雀大路西側築地地形) 13. 灰褐色粘土 14. 灰白色砂質土
 15. 黒褐色粘土, (6・7・8・9・10は朱雀大路西側溝埋土)

朱雀大路西側溝 (PLAN 1 PL. 6-1・8-1) 南北方向の溝で断面は逆台形をなす。幅 4 m・深さ 90cm ある。この溝は南へ流れる。東岸には護岸施設が残存している。それは木杭に木の枝をからませたいわゆるしがらみである。埋土は大きく分けて五層ある。(Fig. 5-6・7・8・9・10) 最下層の灰色の粗い砂層からは、和同開珎・木簡片・土器片・瓦片が出土し、最上層の灰褐色粘土層からは主として瓦が出土している。中間層は、瓦・土器などの遺物は少量であった。

九条大路北側溝 (PLAN 1 PL. 6-3・4) 東西方向の溝で、断面逆台形をなす。幅 3 m、深さ 70cm である。埋土は、下から灰褐色粘土、灰色砂土、黒灰色粘土の順に堆積し、いずれの層にも瓦片を含んでいる。最下層の灰褐色粘土層からは和同開珎が出土している。

暗渠 (PLAN 1, PL. 6-3・4) 暗渠は九条大路堀地部分の調査区の東端と西端で 2 条検出した。いずれも南北方向である。東側暗渠は、掘り形は地表面に対して直角に近く切りこまれている。木樋の一部が残存している。掘り形の幅は今回、確認できなかった。

この暗渠は朱雀大路西側築地と九条大路北側築地の交叉する入隅の部分から、九条大路北側溝への排水の役割をはたす。もうひとつは木樋の残存は確認できなかったが、掘り形も同様のものである。築地入隅から西へ約 3 m いった所にある。築地内側から九条大路北側溝への排水の役割をはたす。両者の前後関係は後者が築地地形でこわされ、前者は築地に逆に切りこんでいるところから、前者が後者より新しいことが判る。

II-B トレンチ (PLAN 1, Fig. 7)

検出した遺構は、段と濠状遺構である。発掘区の北側は道路にかかる。この部分は褐色砂の互層で、佐保川の堤防のかさ上げのたびに橋に通じる道路に盛土を行ったことが知られる。

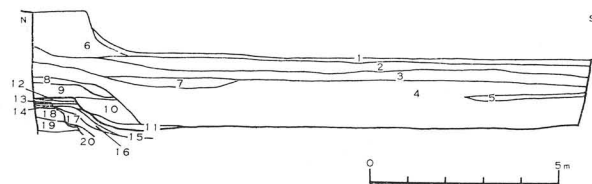


Fig. 7, II-B トレンチ南北土層図

- | | | | | | |
|-----------|---------------|-----------|-----------|-------------|---------|
| 1. 表土 | 2. 暗褐色土 | 3. 灰色粗砂 | 4. 青色粘質土 | 5. 茶褐色粗砂 | 6. 道路盛土 |
| 7. 茶褐色砂土 | 8. 褐色砂 | 9. 灰色小礫含土 | 10. 暗灰色粘土 | 11. 灰色砂 | 12. 灰色土 |
| 13. 灰色粘土 | 14. 灰色土 | 15. 暗灰色粘土 | 16. 灰色粘土 | 17. 暗灰色混り粘土 | |
| 18. 灰褐色粘土 | 19. 灰色粘土・砂の互層 | 20. 暗灰色粘土 | | | |

段 (PLAN 2, Fig. 7) この道路の盛土の下層は、10cm 内外の硬い灰褐色砂質の土層があり、その下は非常に硬い灰色土層となっている。この層の上面は、トレンチ北壁より 1.4m のところで段をもって南へ下る。また、この層の上面からは宋銭や蔵骨器が出土している。さらにこの層の 20cm 下には、灰色砂質土・粘土を交互に積んで比較的硬い層がある。この層の上面も、上層の硬い層と同位置で段をもって南へ下っている。これは奈良時代のもとの

みられるが、この上端は第三次の調査で検出した羅城門基壇の上面よりは約1m低い位置にあり、門の基壇の一部とはいいがたく、門前の施設の一部であろう。

濠状遺構 (PLAN 2, Fig. 7) それより南は深い暗褐色粘質の濠状の堆積土がみられる。今回は底と南限を確かめ得なかった。

Ⅱ-C トレンチ (PLAN 1, Fig. 8)

Ⅱ-B トレンチと同様、段と濠状の遺構がみられた。堆積土の状況もⅡ-B トレンチとほぼ同じである。道路下で観音寺と野外垣の村境の標識がすわっていた根石を検出した。これが道路下に礎石が埋まっているといわれていたものの正体であろう。

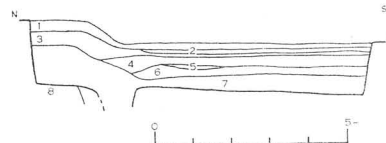


Fig. 8 Ⅱ-C トレンチ南北土層図

1. 表土 2. 床土 3. 黄褐色砂質土
4. 灰褐色土 5. 6. 黄褐色粗砂
7. 青色粘質土 8. 褐色砂

Ⅱ-D トレンチ (PLAN 2, Fig. 9)

ここでも、道路面下約2mのところ、硬くしまった厚さ10cmの黄灰色砂質土がある。この層は、道路南肩の下で切れ、ゆるい傾斜のさがりになり、それから南は灰色の砂層の堆積が広がる。これは、東方の調査区で検出した奈良時代より新しい中世以降の硬い土層と同じである。この層の下約50cmのところ、青灰色粘土の地山がある。その間の土層は黒灰色粘土層で、土師器・須恵器と木質を含んでいる。検出した遺構は濠状遺構である。

濠状遺構 (PLAN 1, Fig. 9) 青灰色の地山は、調査区北端から3m50cm南へいったところで段をもって約70cm、急に下る。これより南は黒色粘土の堆積する濠となっている。濠の南限は段の上端から約28cm南のところでもつかめなかった。京の前面上にかなり幅広い濠の存在が考えられる。

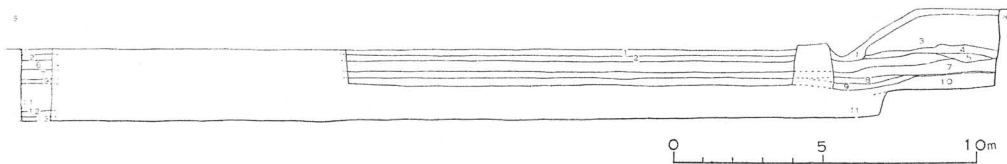


Fig. 9 Ⅱ-D トレンチ南北土層図

1. 表土 2. 床土 3. 道路盛土 4. 灰色粘質土 5. 灰白色砂 6. 青灰色粘質土
7. 暗灰色粘質土 8. 黒灰色粘質土 9. 灰色砂 10. 黒灰色粘土 11. 黒色粘質土
12. 灰色砂 13. 灰色粗砂

4. 第三次発掘調査

第三次発掘調査地は、現在金魚池で、表土は池底の泥である。奈良時代の遺構面は、その下0.8~1.5mで検出した。調査地の土層 (Fig. 11・12) は、黄褐色の粘土が地山で、その上に暗褐色粘質土、灰褐色粘質土、青灰色粘質土、茶褐色粘質土、黄褐色細砂質土、表土の順に堆積している。黄褐色粘土地山の上部は、鉄分の酸化沈着した黄褐色の斑点がみえる。奈良時

代の遺構はこの地山上面で検出した。暗褐色粘質土は瓦質土器・黒色土器片を含んだ平安後期以後の堆積層である。青灰色粘土層は、部分的に砂を含み、上面が硬い。この層中には、宋銭・明銭や瓦質の骨蔵器片を含んでいる。また、この層の上面から切りこんだ東西方向の溝が調査区南側にある。この東西溝の埋土は青灰色砂で、近世の陶器・曲物底・漆器を含んでいる。茶褐色粘質土層および、それより上の層中には近世の骨蔵器・陶器片が含まれている。

奈良時代の遺構を検出した面は、当時の地表よりは相当削平されている。それは羅城門基壇まわりで出土する奈良時代遺物のなかでも瓦の少なさ、基壇掘りこみ地形の浅いこと、雨落溝・基壇化粧石など、門の化粧施設がまったく認められなかったことなどからである。

調査区東側に羅城門基壇を検出し、その西側から約15mの調査区中央部に朱雀大路西側溝南延長部分があり、さらにこの溝の西肩から約5m西の所に南北方向の暗渠の掘り形がある。そのほか、羅城門基壇のすぐ西側に柱穴とみられる穴が4か所ある。

羅城門基壇 (PLAN 3, PL. 4, Fig.10) 検出した羅城門基壇地形は西辺と西北隅で、南北14.4m、東西4.4m、高さ60cmの部分である。南辺と東側の大部分は調査区外にある。掘りこみ地形端から、基壇の残丘裾までの距離は西側で約1m、北側で90cmある。当初の基壇はかなり削平をうけているとみられ、基壇化粧石や雨落溝は検出できなかった。柱位置をきめる礎石のすえ方は、調査範囲が東へ拡大できず、検出した部分では確認ができなかった。昭和10年の来生橋改修の際に佐保川の右岸より花崗岩質の礎石が4個(うち1個は唐居敷をもつ)出土した。現在これらの礎石は佐保川の川底にあり、今回検出した基壇上面より2m低い位置にある。羅城門基壇の規模は平城京朱雀大路の幅を平安京朱雀大路の幅と等しく築地心

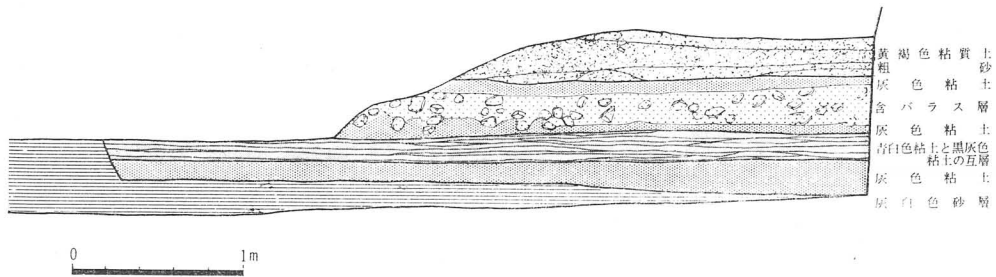


Fig.10 羅城門基壇断面図

で28丈(約84m)と仮定すると羅城門跡第二・三次発掘調査結果より基壇東西幅は32.74mとなる。基壇南北幅は基壇南辺を検出していないが第二次調査のⅡ-Bトレンチで検出した段状の遺構の肩は、今回検出した基壇の上面より1m低く、むしろ今回発掘できなかった市道下に南辺があると予想すると、17.82mになる。

地形は掘りこみで、現状で深さ23cmある。地形はまず坑の下底の凸凹を平坦にならすため粘土を10~15cmの厚さに敷き、その上に順次版築をおこなっている。すなわち、粘土を12cmほどの厚さにこまかくつきかため、その上は礫と粘土で、さらにうえは砂質土と礫でつ

きかためている。

朱雀大路西側溝南延長部 (PLAN 3, PL. 5-1~4) 羅城門基壇西面掘りこみ地形端より西へ14.5mのところ南北に走る側溝を検出した。発掘区の南端で溝の幅は5m (復原値4m) 深さ0.8mある。発掘区の北端ではあふれた流水によって側溝両岸が大きくえぐられ扇形に東西15mほど広がっていた。

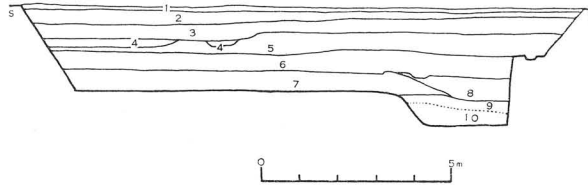


Fig. 11 第三次発掘調査区南北土層図

1. 表土 2. 黄褐色細砂 3. 茶褐色粘質土 4. 青灰色砂 5. 青灰色粘土 6. 灰褐色粘質土 7. 暗褐色粘質土 8. 青灰色砂 9. 砂混り黒色粘土 10. 黒色粘土

この溝は羅城門跡第二次の発掘調査のとき検出した朱雀大路西側溝の南延長部にあたり、羅城の下を貫通して京の外濠にそそぐものと考えられる。側溝の底東寄りに護岸に使用されたと思われる石 (約30×40cm) が多数あった。石の一部は側溝東岸にあり原位置をとどめていると思われる。

溝内の遺物は平安時代のものも含んでおり、この溝は平安時代まで流れていたものと考えられる。

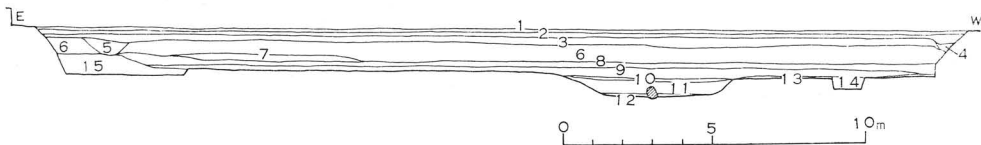


Fig. 12 第三次発掘調査区東西土層図

1. 表土 2. 黄褐色細砂 3. 茶褐色粘質土 4. 黒色土 5. 青色砂土 6. 青灰色粘土 7. 青褐色粘土 8. 灰褐色粘質土 9. 暗褐色粘質土 10. 黒褐色粘土 11. 灰黒色砂 12. 灰色粗砂 13. 黄褐色土 14. 黒色粘土 15. 羅城門基壇版築

暗渠 (PLAN 3, PL. 5-5・6) 側溝西端より西へ3.1mのところ南北に走る幅0.9m, 深さ0.4mの溝がある。溝は地表面に対してほぼ直角にきりこまれている。溝底は北から南に向って傾斜している。この溝は木樋の暗渠の掘り形で羅城の下を通る暗渠と考えられる。

推定築地寄柱穴 (PLAN 3, PL. 4-2・5) 羅城門基壇西面掘りこみ地形の端より西へ0.4mと2mのところ南北に並ぶ柱穴を2対検出した。前者の柱間は2.7m, 後者の柱間は4.2mあり, 南の柱穴は東西にそろいが, 北の柱穴は位置がずれる。

三次にわたる羅城門跡とその付近の発掘調査の結果, 羅城門基壇, 朱雀大路西側溝と同大路西側築地, 九条大路北側溝と同大路北側築地, 羅城の外濠が明らかとなり, 平城京羅城門, 築地 (羅城), 朱雀大路, 九条大路の配置を統一的にとらえることができた。